

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究費

2011年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	文学部 文学科 比較文芸思想専修 助教(A)	片上平二郎 印
研究課題	“小さな文化”の可能性 ー現代的文化実践の自律的形態とその意味ー	
研究期間	2011 年度	
研究経費	500 千円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は日本社会における文化状況およびその中を生きる人々のアイデンティティ形態について考え、そこから現代における文化的諸実践の可能性について考察することを目的とするものである。“大きな物語を失った”と語られるポストモダンの状況の中にある現代社会においては、それまでの時代とは異なった“新たな”文化状況やアイデンティティ形態が存在しているものと考えられる。本研究では、このような時代変化を「サブカルチャーの隆盛」という視点から考えてみることによって、現在存在する「自律的」な文化活動として「自主制作」的な“小さなメディア”の形態とその社会的意味について調査を交えながら考察していくものである。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 文化研究 ] [ サブカルチャー ] [ 現代社会理論 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

「社会」、「文化」、そして個々人の「アイデンティティ」といったものは、どれか1つが他のものを規定するような決定的な審級として存在するわけではなく、それぞれが相互に影響を与えながらお互いの状態が重層的に決定されていくものとして存在している。そのため、これらの存在を考察するためには、独立してこれらの問題を考えていくのではなく、それぞれについて同時に考察を行い、それを重ね合わせながら立体的に思索を深めていく必要がある。本研究では、現代社会の状況や個々人の実存を考察するための社会理論や理論社会学などについての理論的研究と、現代のサブカルチャー実践に関する実証的な研究(資料分析とインタビュー調査を考えている)の2つの研究を並行的に行い、その両者の視点から現在の文化活動の持つ社会との関係性について考えていきたいと考えた。

この目的のために当初、想定した研究内容は以下のようなものになる。

- ① 従来の批判的社会理論の枠組の検証と現代的再構成
- ② 社会理論における「文化実践」という視点の位置づけに関する再検証
- ③ 資料を用いた現代日本の文化表現、文化環境に関する文化史的な調査
- ④ 現在の自主制作的なサブカルチャー表現やその発表媒体などに関する資料に基づいた調査
- ⑤ 史料調査に基づいて選び出されたサブカルチャー表現に関わる人物へのインタビュー調査
- ⑥ 調査内容に基づいて見出された現在の文化状況を文化史の見取り図の中へ位置付ける作業
- ⑦ 上述の作業を統合した本研究の研究結果のまとめ

①②にあるような理論面においては、「サブカルチャー」というものが持つ社会的性格、特に社会批判的性格に関する考察を中心に研究を行った。本研究では「サブカルチャー」という概念を、教養主義的な文化、すなわち「ハイカルチャー」でもなく、また、商業主義的な文化、すなわち「マスカルチャー」でもないような独自の中間領域的な文化として使用したいと考えた。つまり「サブカルチャー」と対立する「メインカルチャー」という概念を、教養や伝統性に基づいたエリート主義的な「ハイカルチャー」に置いて考えた場合にも、また、「メインカルチャー」を売り上げや人気といった多数決的な商業的な「ポピュラーカルチャー」に置いて考えた場合でも、そのどちらの「メイン」に対しても「サブ」でありえるような文化として「サブカルチャー」は定義されることになる。このように定義した場合、「サブカルチャー」は、自らの存在基盤を一方では伝統や権威といったものに置くことも出来ず、また、他方では資本主義的な商業性に置くことも出来ないものであり、自らの社会的な存在意義を自己反省的に構想しなくてはならないような“根無し草”的なかたちで存在することになる。このような現代社会における「サブカルチャー」表現が持つ、社会に対する相対的自律性および独特の批判的実践性に着目するためにも本論文が行った「自主制作」的な“小さな文化”への着目は重要なものとなるだろう。

これまで報告者が研究における基本的視座として採用してきたテオドール・アドルノによる批判理論的思考枠組みは、文化や芸術といったものが社会に対して持つ自律性と批判的実践性の意義を強く主張したものであるが、他方でそこで評価される文化は教養主義的、エリート主義的なものであり、アドルノの文化論が持つ限界も多く指摘されてきている。アドルノの批判理論的思考を、それが置かれた社会的・時代的文脈とは異なった文脈の中で応用するために「自律性」概念の再考と再構成が重要なものとなるだろうと考え、その点についての考察を行った。

また、新たにルイ・アルチュセールの社会理論を研究しながら、その中にある「複数性」という論点に着目することによって、「文化」が持つ批判的可能性について、これまでとは違った軸から考察を行うことができた。ここで得られた論点を「自律性」概念の考察について応用しながら、「社会」と「文化」の関係性に関する再定式化を今後もさらに深いかたちで行っていききたいと考えている。

**研究成果の概要** (つづき)

③④にある資料的な研究は、主に 1980 年代以降の日本における文化状況の変化、およびサブカルチャーの現在の状況に関する見取り図を作成するために行ったものである。大枠で言えば、日本の文化状況において、「自主制作」的な“小さな文化”化の流れはより大きなものになってきていると言える。これは、インターネットなどのメディア環境の充実や技術環境の発達、もしくは文化の産業規模の縮小などによりものであるといえるだろう。

だが、一概に、この“小さな文化”化の流れを単線的な発展過程ととらえることも困難である。それぞれの時代において、それぞれの状況に合わせた“小さな文化”の形態や運動は存在しており、それぞれが独自の「社会」や「文化制度」との結びつきの形態を持っているのであり、より緻密で個別的な分析が必要とされるものでもあるだろう。“小さな文化”に関する文化史的考察は、それを単に量的な発展過程としてとらえるのではなく、個別具体的な質的分析を伴ったかたちで、それぞれの文化が持っていた独特のポテンシャルを描き出す必要があることを確認することができた。今後、新たな資料を確認しながら考察を進めることにより、より詳細な研究を行っていきたい。

⑤のインタビュー調査においては、本研究で言うところの“小さな文化”に関わる人々（演劇や音楽の表現者、批評家、編集者といった人々）に自らの文化的表現に関する態度や現在の状況に対する理解についての聞き取りを行った。個々のリアリティーに由来する聞き取りの中から、現在の文化的状況に関する個別具体的な無数の問題点の存在を理解する一方、共通した文化の現在の状況に関する判断を得ることができた。また、“小さな文化”とは逆に“もっともメジャーな文化”とすることが出来るであろう週刊漫画誌の編集経験者に対するインタビューも行い、現在の状況や文化表現に対する違いとともに一致点などを確認することもできた。

インタビュー調査については、今後もさらに対象を広げていくことによって、研究を進行させていきたいと考えている。

⑥⑦などの統合的作業については、まだ研究途上にあるため中間報告的な段階に留まるが、本研究によって、現代日本における「文化」領域全体における“小さな文化”化の流れを確認することができたように思う。この流れは、一方では、これまで目指されてきたものとしての「文化」の「自律性」の獲得がインターネットなどのメディア環境の進展やテクノロジー環境の発達によってより容易なものとなったため現実化してきているという積極的な理由によるものであるだろうが、他方では、「文化」における産業規模の縮小に伴った不可避な対応策という消極的な理由によって生じたものでもあるだろう。このことは、“小さな文化”の隆盛が、その社会的実践性という側面において「自律性」や「社会批判的性格」の実現というポジティブな要素を生み出すだけでなく、「制度化」や「細分化」といったネガティブな要素を生み出す可能性を持つものであることも示している。

“小さな文化”を単に「自律性」に結びついた「社会批判」的なものとしてとらえるのではなく、より詳細に「文化」の「自律性」概念について理論的に考えていくこと、そして、実証的なかたちで「現代文化」の状況を把握していくことという2つの軸の作業をさらに続けていくことによって、その意義を批判的に検討していくことが重要であることが確認された。

今後は、本期間中に確認されたさまざまな問題点や疑問点を通じて、個々の研究作業を行いながら、本研究の結論を見出したいと思う。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 片上平二郎「アルチュセールのヘーゲル批判と複数形という戦略」  
(『境界を越えて 比較文明学の現在』12号 2012年12月 pp.41-62)